

若旦那様、
もっとあなたの愛が欲しいのです

目次

プロローグ	く華宵亭 <small>かしやうてい</small> の人魚姫 <small>にぎほ</small> く	5
第一章	若旦那様、あなたの素顔を見たいのです	10
第二章	若旦那様、愛しているのは誰ですか	72
第三章	若旦那様、本当の心をお聞かせ下さい	117
第四章	若旦那様、こんなに幸せでいいのでしょうか	161
第五章	若旦那様、わたしはおそばを離れません	212
第六章	若旦那様、もつとあなたの愛が欲しいのです	247
エピローグ	く花酔 <small>いり</small> いに艶 <small>いろ</small> めくきみへく	292

プロローグ 華宵亭の人魚姫

相模湾の絶景が望める、高級老舗温泉旅館『華宵亭』——
熱海の山腹にあるこの旅館は、二万坪の敷地面積を有する。明治期に作られた数寄屋造りの客棟からは、四季折々の花が咲く大庭園が觀賞でき、風雅なひとときを過ごせると評判の隠れ宿だ。華宵亭は客のプライバシーを尊重するため、一般客の宿泊は受け入れていない。利用できるのは、専ら各界で活躍する著名人たちだった。

季節は春。晴天が広がるその日、大庭園ではしだれ桜が満開で、垂れた枝にはこぼれんばかりの薄紅の花が華麗に咲き誇っていた。その下に座り、『人魚姫』の絵本に読みふけているのは、八歳の少女——朝霧雫だ。緩やかな風が頬を撫でると、彼女はふと顔を上げる。

はらはら、はらはら。

豪華な花が風に舞い散る光景は儂く、もの悲しく思え、泡沫に消えた人魚姫が流した悲哀の涙を彷彿とさせた。見ているだけで、雫の胸はぎゅっと締めつけられ、切なくなってくる。

鹿威しが、かこんと清涼な音をたてた後、赤い欄干のある縁側に着物姿のふたりの老婦人が現れた。ひとりには華宵亭の女将。もうひとりはその友人で雫の祖母だ。祖母は呉服屋『あさぎり』の

大女将おおおかみをしており、雫を連れて華宵亭に着物を届けに来ては、大女将おおおかみとのお喋りに花を咲かせる。祖母と大女将おおおかみは、部屋で一緒にまんじゅうを食べないかと雫を誘った。

「シズク、お腹空すくいていないから、お外でまだご本を読んでもいいよ！」

雫は『人魚姫』の絵本を持ち上げて、ふたりに見せた。「シズクちゃん、いつも『人魚姫』を読んでいるけど、他のお姫様の物語は読まないの？」

大女将おおおかみの問いかけに、雫はこくりと頷いて答える。

「シンデレラも白雪姫もいばら姫も、突然出てきた王子様と結婚して、めでたしめでたしで終わるでしょう？ それがいや。シズクも人魚姫みたいに、王子様に恋をしたいの」

恋をまだ知らないはずの幼子がそれを語る姿は微笑ましく、老婦人たちは声をたてて笑う。

「でもね、人魚姫は泡になって消えちゃうでしょう？ シズクが王子様だったら、絶対に人魚姫を好きになる。人魚姫は泣きながら消えちゃったんだろうなと思うと、シズク悲しくて」

肩を落とす雫に、大女将おおおかみが笑みをこぼした。

「人魚姫の…涙か。ねえシズクちゃん。この華宵亭の温泉は、人魚の涙でできていると言われ、人魚の湯とも呼ばれているのよ」

雫の目が好奇心に輝く。

「昔、華宵亭には温泉がなかったの。お客さんは皆、温泉があるお宿へ行くから、初代大旦那は困っていたね。そんな時、海辺を散歩していた大旦那は、悪い人間たちに捕まった人魚を見つけ、助けてあげたの。人魚が御礼にと大旦那へ渡したのが、瓶に詰めた人魚の涙。使えば願いがひとつ

叶うと言われ、大旦那が華宵亭の庭に垂らしてみたら、温泉が湧いてきたのよ」

大女将おおおかみの話に引き込まれ、興奮した雫は顔を上気させた。

「シズクちゃん、そこから細い砂利道じりみちが見えるでしょう？ そこを進んで行くと、秘密の岩風呂があるの。そのお風呂は熱海あつみの海に繋がっているとされていて、時々人魚さんも来るみたい。ちなみにお天気だったら、今日も遊びに来ているかもしれないわ」

「本当!? シズク、行ってくる！」

雫は絵本を放り捨て、大喜びで砂利道じりみちを走った。

爽やかな新緑の香りが濃くなっていく中、啜り泣きにも似たか細い声が雫の耳に届く。

前方に見えるのは、雨避けの屋根がついた質素な岩風呂だ。

その縁にある大きな岩に腰をかけ、下半身を湯に沈めた子供が泣いている。

風に靡なびく、茶色く長い髪。萌黄色もぎせいろの着物からはだけた胸は、雫と同様まだ平らかである。

しかしその顔は大人びて美しく整っており、弱々しい鬚かみりがあった。

今日の前に、人魚姫がいる——雫は目を瞠はなった。

悲恋の代償に海の泡になって消えてしまう、あの人魚姫が、桜の花びらのように……はらはらと涙をこぼし、嗚咽おうえんを漏らしている。

その身体が少しずつ湯に沈んでいくのを見て、雫は青ざめた。

もしや彼女は、このまま海へと繋がる温泉の泡になって消えるのではないか——そう危惧した雫は、力いっぱい叫んだ。

「死んじや駄目！ 生きてえええ！」

途端、雫に向けられたのは、驚いた顔。

雫は、人魚姫を助けるために一心不乱に走った。……が、足場は苔でぬめった石畳。滑って体勢を崩した雫は、悲鳴を上げる間もなく、飛沫をたてて無色透明な湯の中に落下してしまう。

ごぼごぼと水泡が視界に広がる中、水中を優雅に泳ぐ人魚姫の姿が見えた。

ああ、やはり人魚姫は泳ぐのがうまい……そう感嘆している間に抱え上げられ、気づけば岩の上。雫は青空を眺めながら、湿った咳を繰り返した。

人魚姫は横に座り込み、心配そうな顔を向けてくる。

雫はふと、人魚姫の下半身を見た。陸に上がった彼女の足は、尾ひれではなく人間のものだ。脹ら脛は傷だらけで、赤く腫れ上がっており、見るからに痛々しい。

そのままにして人魚姫は人間界で頑張っていたのだ。それを無かったことにしないでほしい。

「わたし、あなたが大好きなの」

雫は涙声で、必死に声をかけた。

「シズクが、あなたとずっと一緒にいるから。だから海の泡にならないで、人魚姫さん」

深い紫がかった、人魚姫の瞳。その奥でゆらりと揺れるものに雫が魅入られた瞬間、人魚姫は困ったように言った。

「……僕、普通の人間の男だけど」

雫のつぶらな目が、驚きと失望に大きく見開かれる。

「え？ 人間……男……？ 人魚、姫じゃ……ないの？」

「違ったら、きみも僕のそばにはいてくれないの？」

彼女——否、少年は儂げに笑う。雫は彼をじつと見つめ、静かに首を横に振った。

「一緒にいてあげる。あなたも人魚姫みたいに、消えてなくなるのはいやだもの。泡になる前にまたシズクが助けてあげるから、生きていて！ そうだ、シズクとずっと一緒にいる約束をしよう」

小指を差し出す雫に、少年ははにかむ。そしておもむろに、己の小指を雫のそれに絡めた。

「指切りげんまん 嘘ついたら針千本のくまず 指切った！」

満面の笑みを見せる雫だったが、ぼかぼかとした春の陽気に加え、温泉から立ち上る暖気と穏やかに笑う少年の雰囲気、とろとろと微睡んでしまった。

「あれ？ もう……寝てる……の？ 指切りして十秒も経っていないのに」

少年は呆れた声を出し、幸せそうに寝息をたてる雫を見て微笑する。

「ああ、でも。本当に……お昼寝したい最高の気分だね」

少年は雫の隣に横たわると、その小さな頭を片腕に乗せ、無防備な寝顔を眺めた。

「約束、か……」

少年が雫の耳元になにかを囁いたが、雫はふにやふにやと言葉にならない声を発して、少年の温もりを求めて抱きつく。少年は雫を抱擁したまま、笑みをこぼして静かに目を閉じた。

——それが今から十八年前。華宵亭女将のひとり息子、雅楽川瑞貴と雫の出会いだった。

第一章 若旦那様、あなたの素顔を見たいのです

梅雨入り間近な、風薫る五月――

華宵亭では白い帯を締める仲居の着物が、桜色から薄い藤色へと色変わりをしたばかり。

大庭園では、旬の花である藤が壮観だった。鯉が泳ぐ池の上にたてられた大きな柵に、白、薄紅、薄藤、濃藤と四色の藤が、一メートル以上もの花房を垂らしている。

陽光に煌めく、迫力ある紫のグラデーション。大庭園に面した廊下を歩む足を止めたのは、今年二十六歳になる仲居、朝霧雫だ。

笑うといまだ少女のような可憐さを滲ませる、楚々とした目鼻立ち。肩まである艶やかな黒髪をまとめ上げた、快活で健康的な女性である。

和装が似合う体形は呉服屋の実家では喜ばれたものの、なで肩とメリハリのなさはコンプレックスなので、実に複雑なところ。

雫は今春、ようやく仲居見習いから新人仲居に昇格した。しかしその仕事は、見習い時代とひとつ変わらない。実家が誂えた風流な着物を身につけながら、先輩仲居に扱かれつつ、今日も裏方要員として華宵亭を駆け回っていた。

そんな雫を魅了した藤の花。昼間は紫水晶のような輝きを見せ、夜のライトアップ時には神秘さ

を強めて、幽玄な空間に観客を誘う。その妖艶さを感じる花を見ていると、藤よりも深遠な紫色の瞳を持つ「彼」と、その柔らかな声が思い出された。

『雫。藤の花には昔からこんな言葉遊びがある。日舞や歌舞伎の長唄『藤娘』に出てくる……』

「……と書いて藤の花……だっけ」

雫が滑らかに口にする、背後でくすりと笑う声があった。

「……昔に僕が教えてあげたこと、よく覚えていたね」

頭の中の声が現実のものとなり、雫は驚いて背後を振り返る。

藤色の半衿を覗かせた、銀灰色の正絹着物姿。深紫色の羽織を手にした白皙の長身男性――華宵亭の若旦那である雅楽川瑞貴が、涼しげな切れ長の目を和らげ、微笑みながら立っていた。

男臭さのない上品で秀麗な顔立ち。右目の下には色気を増すホクロがある。濡れ髪のような艶やかな赤墨色の髪は緩やかにうねり、フェミニンな雰囲気強調していた。

優雅な所作ひとつひとつに妖艶さを漂わせる、まさに藤めいて蠱惑的な美男子だ。

彼は雫より三歳年上の二十九歳。香道・華道・茶道・日舞などあらゆる芸道に秀で、ゆくゆくは七代目旦那を継ぐ予定である。

「若旦那、お疲れ様です」

雫の顔と声が一気に華やぐ。そしてそれは、瑞貴も同じだった。

「雫もお疲れ様。藤の簪が落ちかかっているな。挿し直してあげよう」

仲居は着物の色に合わせ、季節の花の簪をつける。瑞貴は雫の髪にさくりと、下がり藤の簪を

通した。

「よし、できた。……また華宵亭を走り回って、仕事を頑張っていたのか？ 元気なのはいいけれど、無理をしたら駄目だぞ。困ったことがあればすぐに僕に言ってみて」

「わかりました。若旦那に泣きつくことがない程度に、頑張ります」

片手でガッツポーズを作ると、瑞貴は苦笑する。

「きみの頑張りほどの倍以上だから、倒れないか心配だよ」

「それはわたしの台詞です。若旦那は、わたしなど足元にも及ばないぐらい忙しく働いてらっしゃるじゃないですか。若旦那の方こそ、倒れないで下さいね。……と、もしやその羽織、外出されるところでしたか？」

「ん……町内会の定例の会合にね。気乗りしなかったから雫に会えてよかったよ。元気が出た」

そう言っ顔を綻ばせる瑞貴に、雫は問いたくなる。

会えて喜んでくれるのは、幼馴染としての親愛の情ゆえか。それとも——

「僕の可愛い許婚は、いつだって僕を癒やしてくれるからね」

婚約者として、昔とは違った特別な情があるからなのか、と。

雫が瑞貴の許婚になったのは、指切りをしてから二年後。祖母同士が取り決めた話だった。

それまで雫は、瑞貴が泡となって消えぬよう、何度も祖母や両親にせがんで華宵亭を訪れては、瑞貴の後を追いかけて無事を確認したものだ。

ひとりっ子の瑞貴は、雫をとて可愛かった。

『雫、今日もよく来てくれたね。また華宵亭を探検して僕と遊んでくれる？』

雫もひとりっ子だ。両親がともに呉服屋で働いている雫の話し相手は、祖母ばかり。遊び友達もいなかった雫にとって、瑞貴は初めての友であり兄だった。

優しい笑みを絶やさぬ瑞貴は、物知りで、そして聞き上手でもある。

『人魚姫もそんなに雫に好かれて、嬉しいだろうね。もう一度僕と本を読んでみようか。もしかしたら王子様よりも雫を好きになって、今度は泡にならないかもしれないぞ？』

瑞貴は膝の上に雫を置いて、頬をすり合わせるようにして本を読む。そして時々頬にちゅつとキスをして、「可愛い雫が大好きだよ」とわかりやすく好意を示してくれた。

『雫は僕のこと、好き？ 好きだったら、僕にもキスをしてよ』

最初は好きだと口にして、瑞貴の頬にキスを返していた雫だったが、やがてそれが簡単にできなくなった。指を絡ませて手を握るだけでも心臓がドキドキするようになり、身体に触れられると熱くなつてたまらなくなったのだ。瑞貴はそんな雫の変化を見抜くと、意地悪く問うた。

『ふふ、雫。どうしてこんなに真っ赤な顔をしているの？』

含み笑いで見つめたり、優しい笑みをふつと消して、急に真面目な顔を近づけたりもする。なか怖くなって逃げたくなるのだが、瑞貴は強く抱きしめて放してくれない。

瑞貴のそばにいと、心臓がおかしくなる。自分は病気ではないのかと思いはじめた小学校の高学年の時、彼が雫の許婚になった。祖母曰く、結婚は雫が高校をちゃんと卒業したらとのこと。

『嬉しいよ。雫が僕のお嫁さんになるなんて！ 結婚……待ち遠しいね！』

雫の中で結婚とは、童話の終わりを告げるイベントにすぎなかった。恋をしていなくてもできるものとして、瑞貴ほど喜びは感じていなかったものの、彼が本当に嬉しそうだったから、次第に雫も結婚を待ち侘びるようになった。今の楽しい日々の延長上に結婚がある。そう思っていたが——『瑞貴は華宵亭の跡取り。その嫁として、そして次期女将として相応しい女性になってもらいます。これよりお互い、修業に励みなさい』

瑞貴の母である女将により、雫も彼と同じ礼法や伝統芸能を指導する私立一貫校に転校させられた上、若旦那としての修業に忙しくなった瑞貴と、華宵亭で遊ぶことも少なくなってしまった。

雫はポジティブに、学校の方が彼といつでも会えると喜んでいたが、現実は一貫校に転校させられた点をとるので精一杯の雫に対し、中等部に通う瑞貴はすべてが優秀。そのため、華宵亭の外では彼は雲の上の存在で、気軽に近づくことができなかった。

彼に会いに行こうものなら、人波に阻まれて押し返されるばかり。さらに瑞貴のファン倶楽部の結束は固く、彼女たちを通さずに馴れ馴れしく近寄ろうとする雫は、ファン倶楽部のブランクリストに載り、制裁が加えられた。

ただ瑞貴に会いたくだけなのに、水を浴びせられたり、倉庫に閉じ込められたり。一緒に食べようと初めて作った弁当はひっくり返され、一番に見せたかった初めてのスマホは水没させられた。

しかし雫は泣き寝入りしなかった。やらねばなしでは相手を凶に乗せるだけだと学習し、果敢にやり返した。その結果、心身ともに逞しくなったが、学校で瑞貴と会える時間は失われた

まま、彼は高校を卒業してしまったのである。会いたいののに会えず、他の女性たちと同じく遠巻きに見るしかできない立場は、瑞貴にとって特別でもなんでもない。そう思うたび、胸に切ない感情が膨れ上がり、時に涙となってこぼれ落ちた。そして雫は自覚したのだ。自分は瑞貴に恋をしているのだと。今まで近すぎてわからなかっただけで、瑞貴をどうに異性として意識していたから、遠くなってしまう彼を独占したくて、彼に向かっていたのだと。

以前のようには特別な関係に戻りたいと願っても、恋しい彼は雲上人。卒業した瑞貴はますます若旦那業に忙しく、その高みから気軽に下りてきてくれることはなかった。せっかくなスマホの番号を聞いても、声を聞きたい時に彼は出られない。雫が寝ている時に留守電のメッセージがひっそりと残されるのみ。本当はずっと言いたかった。

『どうしてあなたから、わたしに会いに来ようとしてくれないの？』
『あなたは機械に残された声や文字だけで満足できるの？ わたしのことはどうでもいいの？』

しかしそれを呑み込んだのは、瑞貴の立場を理解しようと思ったからだ。彼が若旦那になるために、どれだけたゆみない努力をしているか、雫は昔から知っている。天才肌の彼でも、歴史ある華宵亭の若旦那になるのは大変なことであり、また、逸材をさらに磨こうとする女将の指導は厳しい。瑞貴も、期待されるとそれ以上で応えようとする向上心と責任感が人一倍強く、空いた時間も自己鍛錬を欠かさない。

昔こつそり華宵亭に遊びに行った雫は、瑞貴と女将の日舞の稽古風景に度肝を抜かれたことがあった。いつも穏やかで優しい彼が、あんな過酷な稽古をしていたとは想像もつかなかったのである。

汗を掻き、歯を食いしばって頑張る瑞貴を見て、雫は彼を心から応援したくなった。だから雫は、恋のせいで我儘になりそうな心をぐっと抑え、いずれ来たるふたりだけの時間を染しみに高校を卒業した。しかし瑞貴の父であり、今は亡き六代目華宵亭大旦那に尚早だと反対され、結婚にストップがかかってしまう。

気落ちする雫に、瑞貴はこう言ってくれた。

『いいか、雫。僕が破談にさせない。これはあくまで延期だ。だから僕を信じて待っていてほしい。いい機会だから次期女将……若女将として修業をしておくといいかもね』

それもそうだと思った。ただ待っているよりは、華宵亭のプラスになることを学びたい。

だから東京のホテル観光学科がある専門学校を出た後、色々な旅館で下積みをした。

二十歳の誕生日に瑞貴から郵送された、誕生石がついた雫形のペンダント。それを握りしめて修業に励み、昨年瑞貴に呼び戻されるまで計七年の月日が過ぎていた。

『花嫁修業として、華宵亭の住み込み仲居になってほしい』

若女将修業と花嫁修業の違いがよくわからないものの、花嫁という言葉が出ただけでも、結婚に向けて前進したのだらうと思うようにした。でも、瑞貴は先輩仲居たちに『幼馴染で、得意先の娘』としか紹介しなかったのだ。

やっかみを受けぬようにとの配慮だったのだろう。だが、結婚話は一向に進まない。

彼は以前こう言った。

『若旦那としてきちんと認められた時に、皆に公表したい。それまで許婚というのは秘密だ』

誰もが彼を若旦那だと認めている今ですら、彼は周囲に許婚だと紹介しない。

解禁はいつになるのか。一年後？ 十年後？ それともずっとこのまま？

『あと少し待っていてくれないか。僕が必ずなんとかしてみせるから』

障害があるのか尋ねても、彼は困ったように笑うだけで答えてくれなかった。

……もう二十六歳だ。結婚に焦っているわけではないが、瑞貴に望まれているのか不安になる。

延期されているのは、彼自身がこの結婚に、乗り気ではないからではないかと。

嫌われていないのはわかる。今だって彼の方が忙しいはずなのに、わずかな時間を縫って、雫に優しい言葉をかけてくれるのだから。

それに雫の奮闘ぶりを温かく見守り応援してくれている。今も昔も……「兄」として。

会えなかった昔はそうした「特別」でもいいと思っていた。しかし毎日顔を合わせている今、華宵亭の伝統を守り、客を大切に……その真摯で誠実な若旦那姿を見るたび、彼に強く惹かれる。それだけでなく魅力的な男性へと成長した瑞貴だ。尊敬の念を抱くと同時に、否応なく彼を異性として意識してしまう。瑞貴に女として愛され、求められたいと思ってしまう。

穏やかで清廉な兄の慈愛ではなく、もっと激しい「男」の情愛を見せてもらえたら。

それがなく、結婚話も進まないのは、彼を駆り立てるだけの魅力が自分にはないからだ――

「——雫？ 黙り込んでどうかした？」

考え込んでいた雫は、心配そうな瑞貴の顔が近づいていたことに驚き、背を反らした。

「い、いえ……なんでもありません。ごめんなさい、ぼうつとしてしまっただけです。」

慌てて笑顔を作る。いつからか、彼の前で笑顔を作ることが癖になった。昔は自然と笑みになっていたというのに。

「ちゃんと休憩をとりながら仕事をするんだよ。……あ、そうそう。〴〵と書いて藤の花。……その内容まで、きみは覚えているかい？」

かこん、庭で鹿威しが鳴っている。

「はい。〴〵を縦に十個書いて、真ん中に大きく〴〵を書く。それが藤の模様と……」

「そう。いし…… 〴〵愛おしい」という言葉にかけている」

彼の口から出てくる愛の言葉に、雫の心臓がとくとくと鳴り響く。

「藤の花言葉は、『恋に酔う』。ネガティブな意味として『決して離れない』もあるけれど……僕は、この藤が好きだ」

暗紫の目を切なげに細めて微笑むと、瑞貴は雫の頬を優しく撫でる。

……幼子をあやしているかのように。

「……もつと話していたけれど、もう出かける時間になってしまった」

瑞貴は小さくため息をつき、手にある深紫の羽織を身にまとう。

それを手伝う雫の鼻にふわりと漂ってきたのは、麝香をベースとする彼が調香した甘い香。

昔はもつと爽やかな香りを身につけていた気がする。大人の男として妖しげな魅力を備えた今、瑞貴の香は彼自身のように蠱惑的で、雫の身体を火照らせた。

「ありがとう。じゃあ行ってきますよ」

「はい……。いつてらっしゃいませ」

雫は頭を下げて、瑞貴を見送る。

昔とは違い、彼をそばで感じられるのに、遠くで見守っていた時と同様に切なさも抜けない。彼との距離感が掴めない。

(もつと……素直に飛び込んでいける、近しい関係だったはずなのに……)

“あなたは、わたしのことを女として愛してくれていますか”

そう聞きたくても、怖くて聞けない。

人魚姫と仲良くなった王子ですら、別の女性を選んだ。

もし瑞貴に、恋も結婚も他の女性としたいのだと言われたら――

昔は瑞貴を人魚姫だと思っただけで、泡になって消えてなくなるのは自分の方かもしれない……そう考えると、臆病になってしまふ。学生時代に培った勝ち気で勇ましい性格は、彼の前ではひっそり消えていく。

すべてを捨てても、恋しい王子のそばで生きることを選んだ人魚姫。どんなに王子の近くで、彼

の笑顔を見ている、愛をもらえないために消えていった。

子供の頃に哀れんだ童話のヒロインが、今はとても身近に思えて胸が痛くなる。

(若旦那。わたしは……今年二十六歳になるんです。もう化粧もしている大人の女なんです)
それでもまだ、彼の恋愛対象外、なのだろうか――

。。*。*

華宵亭には、四季の名で呼ばれる四つの客棟がある。それらは庭を眺められる渡り廊下で結ばれていた。一棟には四室。全室部屋食、風呂は予約制。送迎時間が重なる場合は、出入場所を別にするなど、できる限り客同士が顔を合わせることはないように配慮されている。

その日、雫がフロントから一番遠くにある冬の棟の膳を下げていたところ、ベテラン仲居のひとりである仲村孝子が現れ、目を吊り上げた。

「朝霧さん、春の棟のお膳、まだ下げてないじゃないの！」

目鼻立ちがはっきりしていて、華やかな雰囲気を持つ美女のため、怒ると迫力がある。

「あちらの棟は、香織ちゃんに任せていますか……」

「入ったばかりの子がひとりで、あんな重い膳を下げられるはずないでしょう!？」

(わたしの時は、すぐにやらせたくせに……)

香織というのは常脇番頭の娘で、短大を卒業し今春就職した、雫の唯一の後輩である。

ふわふわとした可愛らしい子なのだが、マニキュアが剥がれるからと洗い物も配膳も布団敷きもしない。そんな状態なのに、イケメン客を見ると勝手に担当仲居として挨拶してしまう。注意すれば大粒の涙を流してパワハラだと父親に訴える。今では仲居のほとんどが怒れる番頭を恐れ、香織の我儘を見て見ぬふりして甘やかすため、ますます仕事をしないのだ。

「誰かのせいにしないで、自分で進んでやるくらいの優しさはないの?」

そのまま孝子に返したいと思いつつ、これも修業だと心の中で唱えて落ち着く。

「――申しわけありませんでした。これを片づけてから、すぐ春の棟に向かいます」

雫は冬の棟の部屋から下げた空のお膳を重ね、片手で三膳ずつ持つてすくりと立ち上がる。

「六膳……。私ですら両手に一膳ずつ持つので限界なのに……」

軽やかな足取りで厨房に向かう雫を見て、孝子は引き曇った顔で呟く。

「どんなに扱いても尻尾を巻いて逃げ出さず、大量の力仕事を押しつけてもすぐに終わらせる。あんなに小柄なのに、なんなのあの子……。謎だわ……」

雫は瑞貴の許婚であることを秘密にしているが、彼の幼馴染、かつ得意先の娘という事実だけで、瑞貴に憧れる仲居たちの矚目をかうことになった。

女将がなにも言わないのをいいことに、早く辞めると言わんばかりにいびられているけれど、嫌がらせなら学生時代のおかげで慣れている。培ってきた根性と体力、若干の怪力で乗り切る内に、いつの間にか力仕事が専門となっていた。

人前へ出すには未熟すぎると、部屋担当はおろか接客自体させてもらえないが、雫は十分に外で

経験を積んでいる。それでも下働きは大切だと、仕事を疎かにはしなかった。なにより瑞貴の姿を毎日見ながら、大好きな彼の旅館で働けるのなら、どんな仕事でも愛おしく思えたのだ。

そんな雫が春の棟を見に行くと、甘ったるい声が聞こえてきた。これは香織の声である。

「もう、副番頭ったら！ なにか喋って下さいよう、まったくクールなんだから」

彼女が話しかけているのは、鉄紺色の着物と羽織を着た、黒髪の若い男性だ。

清潔感が漂う、きりつとした美貌の彼は副番頭の片桐大倭といい、雫のもうひとりの幼馴染で、私立一貫校時代の同級生でもある。

女将により転校させられた雫は、しばし新たなクラスに馴染めず、祖母にもらった人魚姫のノートに落書きをして休み時間をすごしていた。そこに、大倭がなにを描いているのかと声をかけてきたのだが、慌てて隠そうとする雫から彼がノートを取り上げた際、ノートが破れてしまったのだ。

雫が大泣きして帰宅した夜、大倭とシングルマザーの小夜子が謝罪のため家に訪れた。そこで初めて小夜子が華宵亭の仲居であることや、大倭と華宵亭の離れに住んでいることが発覚した。

今まで雫が目にしたことがなかったのは、彼らの住居が、瑞貴と探検していない大庭園の外れにあったからだ。そして大倭もまた母屋への立ち入りを小夜子に禁じられていたため、瑞貴たちとの交流がないまま、裏口から出入りして華宵亭の外で遊んで育ったとか。

そうした少なからぬ縁があったため、最初の頃は瑞貴も交えて華宵亭で遊んだこともあったが、瑞貴が忙しくなると、雫の遊び相手は学校でも華宵亭でも気軽に会える大倭ばかりになった。彼は瑞貴に会えずやさぐれる雫を見兼ねて、瑞貴への伝言役を買って出てくれたこともある。大倭は本

当にいい幼馴染で、親友であった。

香織は仕事を放棄して彼に媚びを売っているようだが、大倭は彼女に背を向けて黙々と作業をしている。

（……あれ？ 大倭が香織ちゃんに代わって、客室からお膳を下げてくれたんだ）

大倭は昔から、口は悪いもののよく気が回る。番頭のようにふんぞり返ることはなく、多くの雑用を自発的にこなすため、周囲からの人望も厚い。

「副番頭は偉いんだから、そんなことしなくてもいいんですよ！ それは雫さんのお仕事なんです！ 廊下に出しておけばやってくれますよ」

香織の声に力チンと来た雫は、できるだけにこやかに、ふたりの背後から声をかけた。

「まあ、副番頭。お忙しいのに、わたしたちの仕事まで手伝って下さり、ありがとうございます。

あくら、香織ちゃん、そこにいたの？ 早めの休憩中？」

すると、香織はぎくりとした顔を向ける。

「そ、そうなんですよ。休憩中で……」

「そう。休憩中悪いけれど、わたしと一緒に、ひとつでもいいからお膳を厨房に運んでくれないかしら。仲居のお仕事を副番頭に任せるわけにはいかないでしょう？」

「え……。これ重いし、着物の袖に汚れがついたら困るし」

「たすき掛けてあげる。それに着物は撥水加工。仮に汚れても予備の着物があるから安心して？」

「私は雑用するために仲居になったわけじゃ……」

「仲居になるのはこれからよ。見習いの今は、どんなに汚れても、仕事を覚えるのが大切」
優しく諭したつもりだったが、口を尖らせる香織は手強い。

「雫さんは、化粧が剥げて髪がほつれても気にしないひとだけど、私は華宵亭に相応しい女子力の高い姿でお客様の前に出たいんですよ。着替えれば終わりじゃないんです！」

雫はくらりとする。彼女の言い分を理解できない。

化粧が剥げて髪がほつれるのは、仕事で動き回るからだ。それに休憩時間の合間に、きちんと身だしなみは整えている。女子力が高いとは思わないが、低いと言われる筋合いはない。

「あのねえ……」

雫の声が低くなったことで身の危険を感じたらしい。途端に香織は、大倭の袖を掴む。

「酷いです。雫さんが先輩たちから扱われているのは自分のせいじゃないですか。それなのに、後輩の私に当たって、同じ目に遭わせようだなんて。香織……悲しい。副番頭、助けて下さい」

香織は大倭の袖を掴んだまま、大きな目をきゅるんと潤ませた。

だが大倭はその小悪魔的テクニクに墮ちるどころか、ため息をつき、香織の手を払う。

「泣くのは勝手だが、華宵亭の従業員として仕事をするのが先だと思わないか？」

漆黒の瞳が冷ややかだ。大倭が味方にならないと悟った香織は、屈辱に顔を歪めて「酷い」と言い捨てると、パタパタと走り去った。

「……香織ちゃんって、最初からブレないよね。あそこまで貫かれると清々しくも感じるわ」
「他人事かよ。どうにかなんねえのか、あれ」

「どうにかする方法があるのなら、わたしが教えてもらいたいよ。彼女、仕事がしたいのではなくて、イケメン限定で婚活をしたいの。その候補のひとりが大倭。可愛い娘を泣かせた責任をとれなくて、荒ぶる番頭がやってこなければいいね。気がついたら外堀を埋められていそう」

「怖いこと言わないよ。大体、泣かせたのはお前だろうが」

小声で会話をしながらも、雫と大倭の片づけは素早い。雫がいつも通り三膳すつ両手で運ぼうとしたところ、大倭が奪い取り、雫に二膳が手渡された。

（こうしたところが、男らしいというか……優しいんだよね）

「どうもありがとうね。助かりました」

「仕事だからな」

雫は基本的にぶつきらぼうだが、こうして雫をそつと助けてくれる。

今までどれだけ彼に助けられてきたことだろう。

「お前さ、女将がお袋に訴えた方がいいんじゃないか？ この劣悪環境」

「わたしに、香織ちゃんその二になれと？」

「お前のは正当な訴えだろう？ 仕事量が半端じゃないのに、一方で暇な仲居もいるんだから」

「ははは。まだまだ余裕。それに最初から、耐えるのも修業だつて女将さんに言われてるし」

「だけだよ……」

大倭と仲居長である小夜子だけは、雫が瑞貴の許婚だということを知っている。

「黙って見守っていてよ、今まで通り。これはわたしの修業なの。それに騒ぐことで迷惑をかけた

くないもの。和を大切にする若旦那に……」

大倭はなにか言おうとしたが、口を噤むと顔を背けた。彼の漆黒の瞳が苛立ったように揺れていたことに気づかず、雫は前方から現れた人影に足を止める。

爽やかな若草色の着物と羽織を着た、艶やかな男性――

「……若旦那、お帰りなさい！」

雫は破顔して、大倭の横を擦り抜けた。

その際、大倭が唇を噛みしめたのにも気づくことなく。

「ただいま、雫」

瑞貴は暗紫色の目を細めて柔らかく笑うと、雫の頭を撫でた。

ふわりと、甘い香りが雫の鼻腔を探り、くらくらしてくる。

「頑張っているようだね。なにか困っていることはない？」

「ありません」

雫は今日も笑顔で嘘をつく。瑞貴の笑顔を曇らせないために。

「そう。それはよかった」

瑞貴から感じるのは、彼と初めて会った日から変わらない、ひだまりのような暖かさ。

どんなに心が凍てついても、彼の笑顔を見ると氷は溶け出し、どこまでも頑張ることができる。

「その膳は厨房に？ 僕が返してきてあげる」

「駄目ですよ、若旦那。それはわたしの仕事ですから！」

「たまにはいいじゃないか。少しは手伝わせてよ」

「駄目ですって。若旦那は働きすぎだから、身体を休めて……」

「雫は、僕のことを心配してくれているの？ 本当に優しいね、きみは」

瑞貴が甘やかな微笑を浮かべた時、ゴホンというわざとらしい咳払いが聞こえてくる。

瑞貴はすっと笑みを消すと、冷ややかな声を出した。

「……なんだ、そこにいたのか、雫の腰巾着」

「いたのかじゃねえだろうが、最初から目に入っていたくせに。雫の立場も考えて、周りを気にしろよ！」

昔から瑞貴は、大倭にだけは塩対応だ。そして大倭もまた、周りに人影がなければ、瑞貴に喰ってかかる。取り繕わなくてもいいのが幼馴染のよさだとは思いますが、もうちょっと仲良くしてもいいんじゃないかとも思ってしまう。それとも男同士とはこういうものなのだろうか。

「お前に、こそこそする必要を感じないんだけど」

「少しぐらい俺にも遠慮をしてみせろよ！ ああ、もう。腹立たしいから、先に行ってるわ」

そう言いながらも、きつと大倭は周囲を見張ってくれるつもりなのだ。

「これで、うるさい小姑は消えたな。ようやく僕の許婚とふたりになれた」

瑞貴は、雫の頬を撫でてにっこりと微笑んだ。

「許婚」――それを耳にした雫はわずかに顔を歪めた。小さな棘がついた蔦のようなもので、緩やかに首を絞められている感覚になったのだ。

（いけない、いけない！　ちゃんと笑顔にならなきゃ！）

泣きたい心地を堪えて、笑顔で瑞貴に問うてみる。

「若旦那、指切り、覚えてます？」

「もちろん。僕が泡になって消えないように、きみがずっと一緒にいてくれる約束だろう？」

今は、無邪気に彼の膝の上に乗ることはできない。気軽な触れ合いもできない。

近いのに遠い関係だ。それでも――

「そうです。今も消えないよう、見張っていますからね」

「ああ、見張っていて。結婚してからも僕をずっと」

するりと彼が口にした、結婚という言葉。ちくりと胸に痛みが走るけれど、彼がふたりだけの思
い出を覚えてくれていたのなら、それで満足しよう。

「若旦那。お迎えの時間です！」

大倭の声が聞こえる。

「ああ、そんな時間なのか。じゃあ行かないと。……そうだ、雫」

瑞貴は袖から小瓶を取り出し、中身を指で摘むと雫の口の中に入れた。

それは老舗菓子店『松菓堂』の金平糖。上品な甘さが口に広がった。

「また後でね」

瑞貴は甘い顔で雫の頬を撫で、麗しい後ろ姿を見せて去っていく。

（やっぱり子供扱いされているわ。まあ、いつもくれるこの金平糖は、美味しくて好きだけど）

複雑な気持ちで、雫も急ぎ足でフロントに向かい、入ってきたばかりの客に頭を下げている大倭
の隣に立った。そうして膳を持ったまま深く頭を垂らす。

「若旦那、会いたかったわ」

やってきたのは、月に数度、華宵亭を利用する馴染み客――大女優の吉川映子だ。

瑞貴に抱きつき、メリハリある身体をぐいぐい押しつけ、派手に喜びを体現していた。

後ろには、ぺこぺこ頭を下げる困り顔の男性マネージャーがいる。いつもながら影が薄い。

瑞貴は映子の身体をやりわりと離し、微笑みながら言った。

「お待ちしておりました。いつもの桔梗の間にご案内します」

すると映子が慣れた動きで、するりと瑞貴の腕に自らのそれを絡める。

それを掴まぬ瑞貴に、雫の胸がちくりと痛む。

（嫉妬なんておこがましい。若旦那はエスコートしているのよ、お仕事）

そうは思えども、堂々と女を武器にできる映子が妬ましく、同時にあの美貌が羨ましい。

あれだけ美しい女性であれば、瑞貴の横に立つても誰も文句を言わないだろう。

（若旦那も、ああいう女性なら、隣に立たれると嬉しくなっちゃうんだろうな）

それにひきかえ、自分は――

（ああ、くよくよしちゃ駄目！　わたしはわたし）

雫は気持ちを入れ替え、映子と連れ立って消える瑞貴に背を向け、厨房へ歩き出した。

夕暮れ時になると、華宵亭は茜色に染め上げられる。

特に大庭園の奥に広がる相模湾の水面が、夕映えに赤くなりゆく様子は絶景だ。

雫が小さい時は、よく庭で瑞貴の膝に乗せられ、美しい海と一緒に眺めた。

『雫。夕方は黄昏時というんだ。黄昏というのは、誰そ彼、ともいい、「あなたは誰ですか?」と聞いてしまうくらいに薄暗い頃、という意味なんだよ。段々と夜が近づいて、僕の顔がわからなくなってくる頃、雫は僕を残して帰ってしまうつもりなのか、それとも僕とずっと一緒にいてくれるのか、とても気になって寂しくなる』

放したくないとばかりに、ぎゅっと雫の身体を抱きしめて、瑞貴は言ったものだ。

『誰そ彼』とは反対に、夜が明ける頃のことを、彼は誰、という。同じ薄暗い時でも、これから明るくなって雫と会える、彼は誰時の方が、僕は好きだ』

「——はあ、あの頃はよかったなあ」

赤色に染まる大庭園を見て、雫は過去を思い出したため息をついた。しかしすぐばんばんと頬を手で叩いて、自分自身に気合を入れる。

「昔にトリップしてはいけないわ。今は倉庫に行つて器を探さないと!」

静かに廊下を走るのは、雫の得意技でもある。しかしこの時は焦りすぎて、つるりと滑った。こ

のままでは派手にひっくり返り、大きな物音をたてて客をびっくりさせてしまう。なんとかそれを回避しようとした雫が、両手をばたばたさせて片足で踏ん張っていたところ、帯に後ろから誰かの手が巻きついた。そして優しい声が雫の耳に届く。

「きみの危機だと思つて駆けつけたつもりだけど、体操をしていたとかではないよね?」

瑞貴である。日舞で鍛えた彼の足さばきは神がかり的に音がしないため、気づかなかつた。

「ち、違います。ありがとうございます、助かりました」

「役に立つことができたようでよかったですよ。今、ちょうど夕食の手伝いをしようと、厨房に向かつていたところだったんだ。いいタイミングだったね」

ふわりと瑞貴は笑った。

「しかし、そんなに慌ててどうしたの? 厨房とは逆の方に向かつていたみたいだけれど」

「実は……デザートのみかんの花蜜アイスを載せる器なんです、準備中に五客割れてしまいました。他の仲居は足りない分を伊万里焼の小鉢に入れればいいのですが、板長さんが渋っていますし、わたしも抵抗があるんです。今日は蒸し暑いのに、あの器では高級感があつても冷涼感がなくて。それに白アイ스에琥珀色の蜜をかけても、白磁では色が映えにくい。それで倉庫になら、なにかあるかもと」

すると瑞貴は腕組みをして思案顔を見せた。

「……華宵亭の食事も器も、季節を考えて僕と板長で決めている。特に板長はこだわりがあるひとだし、僕も伊万里焼の小鉢は反対だな。合わない」

「ですよ。大倭も、それなら色つきの硝子皿の方がマシではないかって」
瑞貴はひくりと片眉を跳ねさせる。

「……大倭も知っているのか？」

「え……あ、はい。わたしが聞いてみました。いけませんでした？」

「いや……。そうだな、倉庫に行かずとも、黒い炭焼の皿を使おう。硝子はどうも安っぽい」
瑞貴の返答が意外で、雫は驚きに目を瞬かせた。

「黒？ 白いアイスは引き立ちますが、冷涼感が出ますか？」

「他で涼しさを感じさせればいい。ちよつとついできて」

雫は瑞貴に誘われ、大庭園に向かった。奥の茂みの中に入ると、彼がある花を指さす。

「山荷葉だ」

「サンカヨウ？」

「そう。この白い小花は野花みたいに素朴だけど、ギザギザの葉は蓮に似ているだろう？ 蓮の葉は別名、荷葉とも呼ばれ、これは山でよく見られる花だから山荷葉なんだ。これを使おうと思う」

「はあ……。これが涼しさを感じさせるアイテムになるんですか？ 可愛らしい花ではありませんが」

瑞貴は意味深に笑うと、ホースを引いて山荷葉に水をかけた。

すると水を浴びた白い花びらは、氷細工のように透明になったのだ。

「ええええ……なんで……。うわ、裏まで透明だわ！」

「不思議だろう？ これを皿に添え、一緒に冷たい蜜をかけてもらおう。黒の器だから白い花も映える。山荷葉の変化が、アイスの冷涼感を引き立ててくれるはずだ」

こうしてできた黒皿に山荷葉が添えられた花蜜アイスは、限定五客。目でも楽しめるこのデザー
トは大好評で、板長も今後のメニューに加えたいと大喜びだった。

雫は周囲に誰もいないことを確認して、瑞貴に客の反応を伝えに行った。身振り手振りを加えて嬉々として語る雫に、彼は柔らかに微笑む。

「食事は目でも楽しませるものだとかわかっていたつもりでしたが、やはり若旦那はすごいです。あのお花、時間が経って乾いてくると、また白くなるんですね。手品のようでした！」

「ふふ。大庭園で山荷葉を見つけた時、雫に見せてあげたいと思っていたんだ。……茜さす時間帯をすぎても、こうして消えないで華宵亭にいってくれるきみが、目を輝かせて喜ぶ姿を見たくて」

雫の胸がとくりと切ない音をたてた。

（若旦那も夕陽で、同じ記憶を思い返してくれていたの？ ……彼が思い出したのは、あの頃のわたし？ それともあの頃の自分の気持ち？）

それが聞けず、雫は控えめな微笑を作る。

「ありがとうございます」

そんな雫に向けられた暗紫色の瞳は、切なげに揺れていた。

不意に伸ばされた瑞貴の手が雫の頬を撫で、その親指がおもむろに彼女の唇をなぞった。

なにかを訴えられている気がする。妖しく艶めき出した彼の空気が、雫を戸惑わせた。

「若、旦那……？」

わずかに怯えた雫の声を聞き、瑞貴はため息をつくくと、袖から金平糖こんぺいとうの小瓶を取り出す。長い指でひとつ摘つまんで雫の口に入れ、また瓶を袖にしまう。

それを見た雫は、ふと疑問を投げかけた。

「若旦那の袖からはいつも金平糖こんぺいとうが出てきますが、金平糖こんぺいとう以外のお菓子も入っているんですか？」

「ふふ、案外きみが好きな練り切りとかも入っているかもしれないよ？」

（え……和菓子まで入っているの？ だからいつも甘い香りがしているとか……）

「……ちよっと、覗いてみてもいいですか？」

「だーめ。これは僕の秘密」

瑞貴は、形のいい唇の前に人差し指をたてた。雫はその仕草にエロチックさを感じてどきどきしてしまふ。それを悟られまいと出した声は、やけに上擦うわすったものになった。

「そ、そう言われたら、とても気になるんですが！」

「だったら……ずっと僕を気にしてよ。四六時中」

切れ長の目はぞくりとするほど挑発的で、雫の鼓動がさらに騒がしく跳ねた。

心臓がおかしくなると雫が焦った次の瞬間、暗紫色の目が愉快そうに細められる。

「おかしい体操なんてしていません、さ」

途端に雫は先ほどの醜態しゆうたいを思い出し、真っ赤になって言った。

「あれは体操じゃありませんってば！ 綺麗さっぱりと忘れて下さい！」

「ははは。忘れられないほどすごい体勢だったよ。こんな感じ……飛べない鶴？」

同じ体勢を再現しても、瑞貴の動きはどこまでも優雅である。

「真似しないで下さい。若旦那、誰かが見ていたら！」

雫は焦って、きよろきよろとあたりを見回した。幸い、誰もいない。

「僕の体操だと言えばいい。これから皆で朝の体操としてこれをしようか。雫、指導役頼むね」

「それだけはいやです！」

「おや、仲居が僕の決定に逆らっているのかな？」

「うう……今日の若旦那は、意地悪です！」

雫が恨みがましく涙目を向けると、瑞貴は雫の頬を撫で、優しく微笑んだ。

「ふふ、これも……可愛い僕の許婚いらいまけへの愛情表現だよ」

その言葉は、どこまでも清らかで――

（……ああこれが、わたしが欲しい愛であれば幸せなのに）

雫はまた切ない気持ちで封じて、微笑み返すのだった。

。。*。*

華宵亭では、仲居は昼食を控え室でとるようになっていた。

下したつ端はの雫は、いつも二時頃にひとりりで食べているが、その日は片づけに手間取り、三時過ぎに

なってしまった。自販機の飲み物を買に行く間に香織がやってきたらしく、和室にある鏡台の前で化粧を直している。

気遣って話しかけても返事がない。控え室に重い沈黙が流れる。

他に食事ができる場所もないため、ひたすら胃に詰め込んで、仕事へ戻ろうと心に決めた。

(クレンジングから化粧のやり直し？ それは、ご苦労なこと……)

ちらりと鏡台を窺い見た雫は、鏡に映っている顔を思わず二度見してしまった。

重い一重の目、団子っ鼻に分厚い唇、エラの張った顔。

雫が知る香織とは、似ても似つかぬ顔が映っていたのだ。

(香織ちゃん……よね？ 髪形も、あの化粧ボーチも……)

考えてみれば、あの厳つい番頭の娘だというのに香織はやけに可愛かった。母親がかなりの美人なのだろうと思っていたが、鏡の中の香織は、ずいふんと番頭に似ている気がする。

視線を感じたのか、鏡の中から冷ややかな眼差しを向けられた。

「……笑いたければ笑えばいいでしょう。雫さんは化粧が剥げた最悪な顔でも、中の中くらいの凡顔だからいいかもしれませんが、私は雫さんより若々しくてピチピチなのに、こんな顔なんです。一時間に一回は補正しないといけないだなんて、面倒で理不尽すぎますよ」

辛辣な言葉を浴びせられたことよりも、どんな化粧をすればあの可愛らしい顔になるのかということの方が、雫は気になって仕方がない。再び鏡を見ると、香織が左目を作り終えたところだ。

雫は茶碗と箸を持ったまま香織の横に立ち、じっと鏡を見つめた。

「なんでそんな……かまぼこ形のぱっちり二重の目になるの？」

その感想に反応することなく、香織は雫が知らない小道具を駆使して顔を作る。自分も知る香織の顔に近づいていくにつれ、雫の目が見開かれた。

「神……」

「これくらい当然です。女ですから」

「詐欺……」

「うるせえ、黙りやがれ』ですよ。努力して身につけた武器にケチつけないで下さい。私の素顔、広めるなら勝手にどうぞ。若旦那も副番頭もまるで相手にしてくれないし。私、ここを辞めるつもりですから」

「一ヶ月で!？」

「一ヶ月ももったんだからいいじゃないですか。元々、華宵亭が欲しい父さんが、私をハニートラップに使おうとしていただけです。うまくいかなきゃ、いる意味ないでしょう?」

とんでもない内幕を聞かされた気がする。

「いやだったんですよね、女だからという理由で父親から利用されるの。それに私の学生時代の不本意な仇名、腋臭です。だからさっさと結婚して名字を変えたかった」

(常脇香織……なるほど、常に腋が香っていると)

「ここにも結婚できそうにないし、番頭の娘というだけで、仕事もせず色目ばかり使う……こんな女をちやほやする仲居にもうんざり。逆にいい指導役ぶって仕事をさせようとする、誰かさん

もうざかったし」

香織のことを見誤っていたのかもしれないと、雫は思った。素の彼女はどこまでもドライかつ毒舌で、姿を変えることで複雑なやりきれなさを誤魔化していたのだ。

(ああ、わたし……まだまだひとを見る目がないな)

雫は笑って香織の顔に手を伸ばすと、ほっそりとした輪郭を作っているテープを一気に剥がす。「ちよっと、なにするんですか!」

素顔のエラが目立ち、香織がヒステリックに怒鳴る。

「猫を被ってできないフリをしていた挙げ句、逃げようとしている罰。ギブアップはまだ早いよ、香織ちゃん。努力と根性があることを、あなたはまだわたしたちに見せていない。このままじゃ、ただの世間知らずの負け犬だよ」

香織は返事をしなかった。

「わたしなら、できないと思われるのは絶対いや。皆ができてることなら特に、どんな努力をしてもやり遂げたい。それが、わたしのプライド」

「どんなに頑張っても、ひとと同じことができなかったらどうするんですか……」

香織は握った手に力を入れて、ぼそりと呟く。

「自分は、顔以外でもひとより劣っていると、再認識させられるだけなのに」

香織はきつと、顔の造作で傷ついてきたのだ。そのせいで必要以上に臆病になっている。彼女にとって化粧とは、弱い自分を守る虚勢なのだろう。培った技がなければ、己がいかに脆弱なのか

悟っている。努力しないことは、彼女の逃げ道なのだ。

「やってみたいとわからないじゃない。自分の可能性を信じてあげないの？ まだわたしより若いのに、人生、そうやって諦め続けるの?」

「……っ」

「可愛さ以外に、努力してもうひとつ武器を手に入れようよ。あなたがアプローチしなくても、男の方が、顔だけじゃない女」って寄ってきてくれるような。一石二鳥だと思うけど」

雫の提案に、香織は小さく答えた。

「……頑張ったら。若旦那、振り向いてくれますかね?」

途端に雫は血相を変える。

「ターゲットは若旦那!? 駄目よ、駄目! 彼は振り向かせちゃ、絶対駄目!」
思わず私情を挟んで即答した後、気まづい沈黙が流れた。

「……雫さん、副番頭ではなくて若旦那が本命なんですか?」

「い、いや、その……」

なぜ大倭の名前が出てくるのかと思いつつ、自爆してしまった雫は頬の熱さを感じている。

「うわ……まるで裸でエベレスト登山に挑戦するような無謀さ」

雫はずうんと落ち込んで、その場で四つん這いになった。そしてふと思う。

自分には瑞貴を振り向かせるために、女として、努力して身につけた武器はあったかと。

彼に恥をかかせないように、仲居の仕事は全力で取り組んできたが、瑞貴個人に対しては、昔か

ら素のままだった気がする。香織のようなアピールもしたことがない。
(もしかして、子供扱いされているのは、わたしのせい!?)

今の自分が女らしくなれば、いくらかは意識してくれるだろうか。

「大体、色気皆無の雫さんと色気垂れ流しの若旦那が、釣り合うわけ……」
雫は両手で、香織の手を強く握りしめた。

「香織ちゃん。色っぽくなれるお化粧方法、教えて。今すぐ!」

。。*。*

「香織ちゃんのメイクは、神技だわ。今まではなかった色気っぽいものも出ている気がする」
雫は化粧室の鏡に自分の顔を映して、感嘆の息をつく。

教えを乞うたものの、結局、雫の不器用さを見兼ねた香織にメイクをしてもらったのだが、のっぺりしていた顔に陰影がつき、肌つやもよくなった気がするのだ。香織に散々毒を吐かれた甲斐がある。

(これなら若旦那も、少しはわたしを意識してくれるかな……)

「……いけない、こんな時間。仕事に戻らないと」

休憩時間後は、華宵亭自慢の懷石料理の準備が待っている。

本日の懷石料理は七品。客の食べる速度を見計らい、適温の品を部屋に運ばないといけない。

夕食に関しては、仲居全員が手分けして配膳することになっている。

さらに華宵亭の名物は、女将が作る季節の食前酒。旬の花や果実を漬け込んだもので、味だけではなく、色や匂いも同時に楽しめる。

配膳室は戦場だった。せっかくの化粧を瑞貴に見せに行く時間もない。

厨房は板前たち男性調理人の神聖な場だ。昔、女性は立ち入り禁止だったらしいが、今は仲居も出入りができ、完成したばかりの上品な料理をすぐにカートで運ぶことができる。

雫があたふたと料理をカートに入れてみると、ふと白髪頭の板長と目が合う。

彼は副板長の時から雫を知っていて、瑞貴や大倭どのおやつにと、よく和菓子を作ってくれた。

「どうした雫ちゃん。今日はやけに色っぺえな」

褒められた雫は顔がにやけないように気をつけながら、いつもと同じだとすまして答える。

「女が変わる時は男絡みだと相場が決まっているもんだ。男だろ、片桐の坊主か?」

「なんで大倭が出てくるんですか。板長さんご存じでしょう、ただの幼馴染です」

「いやいやいや。お前さんがそうでも、あの坊主は……」

その時だ。

「……まだかな。待っているんだけど」

苛立った声を響かせて、中に入ってきたのは瑞貴だった。

慌てて謝罪の言葉を口にして頭を下げるふたりだが、瑞貴の様子はいつもとは違うままだ。無表情でふたりの横を素通りすると、カートに料理を載せ始める。

「若旦那、わたしがやります」

雫は青ざめた。仕事中に無駄口を叩いていたから、瑞貴を失望させてしまったのだ。雫は涙を堪えつつ料理をカートに載せ、配膳室に運ぶために誰もいない廊下へ出た。

唇を噛みしめ足早にカートを押していた雫の腕を、ため息をついた瑞貴が引く。

「……ごめん、大人げなかった。だからそんなに泣きそうな顔をしなないで」

ああ、まただ。子供すぎる自分をあやすために、彼は正論すら呑み込む。自分はまだ彼の庇護の下から抜けきれしていない、未熟な子供のままなのだ。

「若旦那が謝られることはありません。わたしが至らなかつたからです。肅として受け止め、今後二度と若旦那を失望させぬよう……」

しかし瑞貴は暗紫色の瞳を大きく揺らし、悲しげな表情を浮かべた。

「いつからきみは……」

「若旦那？」

瑞貴はおもむろに手を伸ばし、ほつれた雫の髪の毛の束を耳に掛ける。

「……その化粧、やめてくれないか」

「え……」

「きみには似合わない。いつものにして」

冷ややかに響く瑞貴の声。鼻の奥はつんと熱くなり、同時に胸がじくじくと痛む。

（意識してもらおうどころか、不興……）

「……わかりました。お見苦しいものをお見せしてしまい、申しわけありません。配膳室に行つてから、直ちに化粧を直して戻ってきます」

震える声でそう言うと、奥歯を噛みしめて小走りに去つた。

瑞貴が名前を呼んだ気がしたが、雫は止まらない。

彼と顔を合わせたら、涙が溢れていることに気づかれてしまうから。

（どうしよう、このまま配膳室に行つたら、泣いているのがバレちゃう……）

そんな時、大倭の姿が見えた。雫は彼を呼び止め、カートを配膳室に運んでほしいと頼んだ。

「配膳室？ 別にいいけれど、ここまで押してきたなら、お前が持つて……」

言葉を切つたのは、雫の涙に気づいたからだろう。

「うわ、泣いたら、ますますドブス」

「……うるさいわ、この常時イケメンもどき。顔を直しに行きたいの！」

「今夜『四季彩亭』で、生ビールおごれよ？」

「すぐそこに持つていくだけなのに……。わかつたよ、お願いします」

「商談成立！」

大倭とハイタッチをしてから急いで控え室に走る雫は、そんな様子を……瑞貴が、暗い眼差しで見つめていたことには気づかなかつた。

華胥亭にある居酒屋『四季彩亭』は、完全個室制となっている。

海の幸料理が特に絶品で、雫が好きなホタテ貝のバター焼きは、ホタテがとても大きく肉厚であり、病みつきになる美味しさだ。さらに従業員割引をしてくれるのだから、太っ腹だと思う。

「信じられない、あの愛されメイクを落とせだなんて……！」

ウーロン茶の入ったジョッキをテーブルへ乱暴に置いたのは、香織だ。

アルコールが飲めないらしい彼女は、素面なのになんか荒れている。

「……おい、雫。なんであいつがいるわけ？」

大倭が香織を見ながら、横に座る雫にぼそぼそと耳打ちした。

「……わたしがプライドを傷つけちゃったから、おわびに連れてきたの」

仲居にとつて忙しい夕食の時間帯ですら、香織はいつも雲隠れをしていた。そんな彼女を戦力外とみなしていた仲居たちの前に、手伝いたいと香織が殊勝な態度で現れたのは、数時間前のこと。

思わず雫が驚いた顔を向けると、香織はそれ以上に驚いて尋ねてきたのだ。

『どうして貧乏臭いメイクに戻っているんですか！ 私がした化粧は!?』

それで事情を説明したところ、彼女が荒れ狂ったため連れてきたのだった。

「……ねえ、副番頭。私がした雫さんのメイク、見たんですよね？ あのメイクの雫さんと、この

貧乏メイクの雫さん、どちらが可愛いと思います？」

すると大倭は、事もなげに言う。

「俺はすつぴんの雫を見慣れているし、変な武装されるより、化粧しない方がいいからなあ」

「うわー、何気に独占欲丸出し。せめて化粧が落ちるくらいの激しいセックスができるようになってから言ってみなさいよ。ヘタレな副番頭さん」

ビールを呷っていた大倭は途端に噴き出し、げぼげぼと咽せ込んだ。香織流のジョークだと思っ

ている雫は、遠い目をしながら大倭に水を差し出し、彼の背中を撫でる。

「……こ、こいつ、なに？ なんてキャラ変？」

「私、素はこっちです。ぶりっこキャラはおふたりの前ではもう意味がないので、やめること

にしました。これからはのびのびと、日頃のストレスを発散させてもらいます」

香織はひとつ残っているホタテを箸でぐさりと突き刺すと、豪快にかぶりついた。

「あ、それわたしのホタテ……」

涙目の雫に構わず、香織は別の話題を振る。

「若旦那のタイプってどんな女性なんですか？ まさかブス専？ 歴代彼女はブスばかり？」

「若旦那のタイプ……わたし知らないや。彼女……いなかっただけだ」

「いないってことはないでしょう、あのスペックで。雫さんが知らないだけでは？」

香織の言葉が心を抉る。確かに瑞貴なら、どんな美女でも選り取り見取りだ。彼には恋人や、一

夜限りの存在がいたのだろうか。……もはや、現在進行形で。

若旦那様、もっとあなたの愛が欲しいのです

(いやいやいや！ 若旦那は忙しいし、恋人を作っている暇などないはず……)

同意を求めて大倭を見ると、彼は店員にホタテと飲み物を追加注文している。

注文が終わると、雫は香織からの質問を大倭に投げかけた。

すると彼は、心底いやそうな顔で答える。

「あいつはブス専どころか、どんな美女でも落ちねえよ。なのにあいつが少し優しく声をかけただけで、女たちが勝手に自分は特別だと勘違いし、醜い争いを繰り広げる。俺なら望みを持たせないけど、あいつは夢だけ見せる分、残酷だ」

すると香織が、こくこくと頷きながら言った。

「確かに私が声をかけても、副番頭のようにうざがらず、にこにこしていましたしね。私はあれを特別な優しさだと勘違いするほど経験値が低い痛い女ではないですが、雫さんに対してもそう？」

特別な優しさだと思っていた経験値が低い女は、返事の代わりに突っ伏した。

「ホ、ホタテ来たぞ、雫。お前の大好きなホタテ！ 食べて元気出せ、な？」

雫は鼻を鳴らして顔を上げると、熱々のホタテを口にする。悲しみが吹き飛ばすほど、今日もホタテは美味しい。我ながら単純だと思うが。

「……おふたりは普段も一緒に飲んでるんですよね？ そこに若旦那が入ることは？」

「ないない。若旦那、仕事とか稽古とか忙しいし」

瑞貴は月に一度、大庭園にある神社の、神楽殿にも似た小さな舞台で利用客に舞いを披露するため、時間がある時は日舞の稽古をしている。その時間を邪魔したくはない。それでなくとも若旦那

業は重労働。稽古がない時は身体を休めたり、自分の時間を満喫したりしてほしい。

「忙しいといっても、三百六十五日、毎秒忙しいわけじゃないでしょう？ 若旦那も従業員も月に数度の深夜勤以外、終業後は自由だし、休日もちゃんとあるし。若旦那からお誘いは来ないんですか？ 遊びに行こうぜ、食べに行こうぜー！ 的な」

雫と大倭は同時に、ないと即答する。すると香織は怪訝な顔をしてさらに尋ねた。

「……若旦那、おふたり以外に友達いるんですか？」

「友達？ どうなんだろう……。大倭、知ってる？」

「興味ねえし」

「本当に幼馴染なんですか、あなたたち！ 幼馴染としての会話、しないんですか!？」

香織の剣幕にたじろぎながら、雫は答える。

「し、しているよ。立ち話はよくあるし」

「どんな話をしているんですか」

「お疲れ様とか、身体を大切にとか。仕事のことや昔の話、お花やお菓子、体操……まあこれははいや」

「どの老人の会話ですか。二十代がする会話じゃないです！」

「や、大倭の方は、もっと軽口を叩き合っているよ？ 素を見せて」

「エベレスト登山しようとしているのは、副番頭じゃないでしょう？ ではもうひとつ聞きますが、雫さんにとって幼馴染の利点ってなんですか？」

「優しくしてもらえる……?」

「あの若旦那は皆に優しいんです。幼馴染に特別な優しさがあるのだとすれば、化粧だって落とせなんて言わずにベタ褒めするでしょう! だったら幼馴染が知る若旦那の裏情報は? たとえば皆に隠している趣味や癖があるとか、スポーツや音楽はなにが好きとか」

改めて考えると、瑞貴の個人情報は何ひとつわからない。そばにいられることに満足していたため、知りたいとも思わずにいた。

(幼馴染)「幼馴染だから知れる情報? え……と」

「携帯番号とかメールアドレスを知っている!」

「では、それを使って週に何度、連絡をとり合っています?」

「連絡もなにも……用があれば、昼間本人に直接言えばいいし」

すると香織は哀れみの目を向けてくる。そのため雫は、別案を口にした。

「昔の若旦那を知っているし!」

「……それ、現在のエベレスト登山に役立っています?」

すると訝しげな顔をした大倭が、口を挟んだ。

「なあ、さつきからエベレスト登山つてなに?」

「雫さんの無謀すぎる挑戦のことです。……雫さん。ちなみに、若旦那の誕生日や血液型、身長とかは知っていますか?」

「し、知っているよ! 誕生日は九月四日! 血液型は……確かAB! 身長は知らないけど」

「誕生日は正解ですが、血液型はA! 身長は百八十一です」

「あれ、A型だったっけ……って、なんで香織ちゃんが知っているの?」

「そんなもん、本人に直接聞いたんですよ。こんな下っ端にもオープンにする程度の情報も知らないなんて、幼馴染の特権なぞ意味ないじゃないですか!」

「う……」

「雫さんは、幼馴染という関係に胡座をかいて、若旦那に対する積極的な姿勢が欠けています。今の雫さんは、緑側で茶を啜り、昔を思い出してほのぼのしている老婆に等しい! ……私が断言します。エベレストどころか熱海の山だって登れませんかよ、よぼよぼの雫さんは」

……雫の体力気力のゲージが、一気にゼロとなった。

。。*。*

『もつと若旦那に興味を持って』と、香織に懇々と説教をされて、小一時間。大倭が寝てしまったため、叩き起こしてお開きになった。

華宵亭の従業員は、徒歩五分の場所にある完全個室制の寮から通っている。

例外なのは雫と大倭と、仲居長の小夜子だけだ。

小夜子は、身体が弱く昔から寝込むことが多かったため、ゆっくりできるよう女将に離れを与えられたらしい。庭の裏手にある元蔵を改装したもので、今彼女はそこでひとり暮らしをしていた。

雫と大倭は、従業員用に用意された離れの一室にそれぞれ住んでいる。他に住まう者がいないため、六畳二間の使用を許されていた。

だが厳格な女将の部屋が近いため、騒ぐことはおろかくつるぐことも難しい。それもあってほとんどの仲居は寮を選ぶが、雫にとつてはそれがデメリットには思えなかった。静かで広い部屋に三食つきで通勤時間なし。従業員用の温泉に気兼ねなく入り放題。パラダイスである。

「子供じゃないんだから、家まで送らなくていいですつてば！」

「駄目！ 女の子を夜道にひとりでは帰せません」

時刻は二十二時を過ぎている。雫は大倭とともに香織を寮まで送り届けようと、香織を説得しつつ、三人で従業員専用の裏口を出た。

「あれ……若旦那じゃね？」

突然の大倭の声に、雫は彼が顎で促す方を見る。淡いオレンジ色の街灯に照らされ、それっぽい後ろ姿が見えた。雫たちが裏口に現れる少し前に、外に出ていったようだ。

「学生服以外の洋服姿、初めて見たかも。……こんな時間に外に出るなんて、散歩かしら？」

「もしや、誰かと逢引きとか？」

不穏さを孕んだ香織の言葉に、雫は引き攣る。

「ねえ、つけてみませんか。ただの散歩ならそれでよし。もしかすると些細な発見が、登山攻略のヒントになるかもしれません」

登山攻略と聞いて雫は鼻息荒く賛同し、香織とともに尾行を開始する。渋々大倭もついてきて、

ちよつとした探偵団の気分だ。

瑞貴は、裏手の一角にある雅楽川家のガレージを開けて入った。

やがてエンジン音が聞こえてくる。

（若旦那が、免許を取っていたことすら知らなかった……）

軽くシヨックを受けている雫に、香織が早口で言った。

「追いかけてみましょう！ 副番頭、車のキーあります？ 社用車、近くにありましたよね」

「あ、ああ。鍵は持ち歩いているけど、俺……酒を飲んでいるし」

「私が運転します。こう見えて私、運転は得意なんです。任せて下さい」

ふたりは目を輝かせる香織に腕を掴まれて、小さな箱形車の後部座席に放り込まれた。

目の前を走り抜けたシルバーのスポーツカーを追いかけ、白い軽自動車爆走する。

瑞貴の車は高速に乗った。引き離されるかと思いきや、香織は一定距離をあけて食らいついている。そのことに大倭が驚きの声を上げ、雫は恐怖の声を上げた。そして香織は高笑いをする。

「『ころがしの赤薔薇』が、高級外車などに負けるものですか！」

（その物騒な二つ名はなに……？ 怖くて聞くことができないけど、どうかどうか！ あの世ではなく無事に目的地へ着きますように……）

雫の切なる祈りが通じたのか、首都高の看板が出ると、瑞貴の車は緩やかに減速した。

「……都心……に向かっていますね」

訝しげな香織の声が響く中、車外の景色にイルミネーションがぼつぼつと光り出している。出口

を下りると夜景は明るさを増した。ぎらついたネオンの光に眩暈がしそうだ。

「こんな時間なのにホテルや住宅街に向かわず、繁華街に向かっているということは……夜遊びでもする気でしょうか。そういえば雫さん、東京に住んでいたんでしたっけ。心当たりは？」

「わ、わたし、東京で若旦那と会っていないんだけれど。一度も」

雫が涙声になると、大倭はなにも言わずぼんぼんと雫の肩を叩いて励ました。

瑞貴は『siene』と看板が掲げられた建物の前で車を停める。降車すると黒服の男が現れ、瑞貴は車のキーを渡して建物の中に入っていく。

「ここは……噂に聞く人気クラブ、セイレーンですね。あの入り口はVIP会員専用のはず。それを顔パスですか……」

知った顔で唸る香織に、大倭が怪訝な目を向けた。

「ずいぶん詳しいな、お前」

「こっちの短大に通っていた頃、よく遊びましたから。クラブって、パーティードラッグの温床になることもあるんです。ヤバいのに巻き込まれそうになって、今は足を洗っていますけど。しかし若旦那クラスなら、ここまで来なくても近場で女漁りができそうなものを。まあいいわ、行きましょう。昔取った杵柄、駄目元で会員入り口にあたってみます」

車は裏手の駐車場に停めた。瑞貴が消えた入り口に行くと、黒服が立ち塞がる。

すると香織は、海外ブランドのロゴがついた長財布の中から黄金色に輝くカードを取り出した。

それを見た途端、黒服たちは恭しく一礼し、三人をすんなりと中に通したのだった。

香織はカードをしまいながら、事もなげに説明する。

「このパスカードがあれば、東京にあるクラブなら大体、連れとともにVIP待遇で入場できるんです。捨てないで置いてよかった」

（なんでそんなものを持っているのかは謎だけど、わたしの知らない世界をよく知る香織ちゃんの方が、大先輩に思えてくる……）

年上の威厳がガラガラと崩れ落ちる音を聞きながら、雫は香織について中に入っていく。

途端に身体を突き上げてくる重低音。ホールには近未来的なダンス音楽が絶え間なく流れている。大画面とDJブースがあるメインフロアでは、音楽に合わせて無数の光線が飛び交い、たくさん男女が踊り狂っていた。

狂騒的な音に負けじと、香織は声高にふたりに話しかけた。

「この混雑ぶり、さすがはセイレーンです。見たところ、両脇のBARカウンターやラウンジにも、若旦那はいないみたいですね。彼ほどの美形がいれば、女たちが群がると思うので。二階のVIPルームにいるのかもしれない。見えますか？ 硝子張りになっている、あそこです」

香織が指し示す場所はわかった。しかし雫は、そこで瑞貴の姿を確認するのが怖いとも思う。

謎めく彼のことを暴いてみたいのは事実。だが——この場はあまりにも瑞貴のイメージからかけ離れている。

彼はひだまりのように穏やかで清らかな男性なのだ。荒んだ夜の喧噪が似合う男ではない。

もしあそこに瑞貴がいたら、今まで想い続けてきた彼の姿が泡のように消えてしまうのではない